



ヒトラーに傾倒した男 A級戦犯・大島浩の告白 増田 剛 著

論創社 (2022年7月) 2,000円+税 / 192ページ



評者



津田塾大学
学芸学部 教授
西川 賢

歴史が突きつける 残酷な問い

一人の人物の決断や意見が全体の運命を狂わせることは、さまざまな組織で見られる現象ではないか。この場合、「声の大きい人」が完全に状況を見誤っていたとしたら、どれほどの被害が出るのか。そうした全体の誤りを導いた当人は、事後にどのように自らの過ちと向き合っていくのか――。

本書は、駐独大使を務めていた大島浩という戦前の外交官に関する新発見の資料をもとに、第二次世界大戦中の大島の国策決定に関する影響を検討したテレビ番組の内容に加筆を施したものだ。専門家による本格的な研究書というよりは、取材の過程で記者が発見した興味深い新資料・新証言の紹介という性格が強い。

筆者は、日本史はまったくの門外漢で基礎知識に欠けるのだが、大島浩という人物については、アドルフ・ヒトラーに心酔し、日独伊三国軍事同盟締結の立役者となり、日本を枢軸国側に引き込む国策の誤りを導いた戦前のリーダーの一人という否定的な評価が一般的だろうと理解している。本書で解説されている新資料からも、大島がヒトラーを盲目的に個人崇拜していたこと、大島が親友と信じて疑わなかったリッペン

トロップには体よく利用されるような関係であったこと、大島が軍事面だけを見てドイツ勝利を妄信し、都合の悪い情報を恣意的に取捨選択していたこと――、それらすべてが相互に作用して国策上の過ちを招いた事実が示されている。

本書を読んで印象深かったのは、大島をはじめ、当時の日本政府にあって政策決定に関与した人々が、例外なく戦後になってから当時の自己に対する正当化や弁護をしている点ではないか。当時ハンガリー公使だった大久保利隆は、大島と対峙して対ソ開戦を制止したと語る一方で、三国同盟には自分はしぶしぶ賛成したものの、実は反対だったと述べている。大島には、スターリン暗殺計画に関与したとする見解があるそうだ。本書の取材資料によれば、極東軍事裁判の際には計画への関与をかくくなく否定した大島は、第二次世界大戦後、かなりの年月が経過してから関与をほのめかす証言をしたとある。

決定的な影響力を持つ人物が誤った根拠に基づいて致命的な判断を下そうとしているとき、命を投げ出すような勇氣を持ってそれを静止し得るのか。政治的指導者が過ちを犯すことは時に不可避であるとしても、一切の言い訳を排して自らの行いに直面することは可能なのか――。歴史がわれわれに突きつける問いは、残酷なまでに重い。